

UNIVERSITY OF
CAMBRIDGE
Department of East Asian Studies



二松學舎大學
NISHOGAKUSHA UNIVERSITY



Emmanuel College Cambridge

Graduate Summer School on Edo-period Written Japanese

Reading *hentaigana* and *kuzushiji* Manual

Laura Moretti



04-16 August 2014

First part: some basic knowledge	
Introduction: The age of <i>wabon literacy</i> 和本リテラシー	p. 4
Japanese manuscripts and woodblock printed books: useful terminology <i>Kobitsu</i> 古筆 <i>Hanpon</i> 板本 and <i>shabon</i> 写本 <i>Komonjo</i> 古文書	p. 11
Reading and transcribing Edo-period texts 1. How can I locate the original? 2. What edition should I create? 3. What text should I choose as my <i>teihon</i> 底本? 4. What tools will help me in reading and transcribing the text? <i>Hentaigana</i> 変体仮名 : a helpful chart and some tips <i>Kanji, kuzushiji</i> and much more 5. Produce your <i>hanrei</i> 凡例	p. 17
Second part: examples of <i>honkoku</i>	p.32

First part: some basic knowledge



Introduction

The age of *wabon literacy* 和本リテラシー

We are living in a very exciting age when it comes to pre-Meiji texts, in particular Edo-period texts. This is due partly to the fact that accessibility to these texts has been steadily enhanced thanks to various projects of digitization developed in recent years and partly to the fact that the community of Edo-period scholars within and outside Japan has been growing. But these are not the only reasons. More than anything else, from 2008 scholars in Japan have begun drawing attention to the need to provide younger generations with the necessary tools to access not only their ‘present’ but also their own ‘past’, so as to build a better ‘future’. In particular Nakano Mitsutoshi 中野三敏 has become the advocate of what he has named *wabon literacy* 和本リテラシー.

There are two terms that need to be defined here. The first is *wabon*. As Peter Kornicki explains it, *wabon* is a word ‘generally used loosely to include books with Japanese binding (*watajibon* 和綴本), folding books with leporello binding (*oribon* 折本) as well as other forms of binding, and includes both manuscripts and printed books. In other words it is used to distinguish books produced in Japan up to the end of the Edo period as opposed to imports from Korea or China’. The second term is ‘literacy’. In this context, ‘literacy’ indicates the specific and basic skills that are required to ‘read’ *wabon*. These specific basic skills mainly refer to *hentaigana* 変体仮名 (multiple variants of *hiragana* signs used for representing a single sound) and *kuzushiji* くずし字 (calligraphic renderings of *kanji*). These skills might appear difficult, even daunting, to us today but we should never forget that they were part of the daily-life of Japanese people up to the first twenty or thirty years of the Meiji period. Therefore *wabon literacy* is an intellectual movement that aims at putting young Japanese back into a position to be able to read *wabon* freely and without any ‘literacy’ barrier.

The present workshop posits itself in this wider context. It aims at providing the younger generations of scholars, who work in any field of pre-Meiji studies and in particular on Edo-period printed books, with the necessary skills to read and to transcribe pre-Meiji texts. In other words, this workshop wants to allow younger scholars to have the knowledge which is necessary to freely access pre-Meiji *wabon* and to make these texts accessible for non-specialists.

In order to allow you to better understand the wider intellectual context into which our workshop posits itself, we are giving below some of the most relevant passages of Nakano Mitsutoshi’s work.

Laura Moretti

University of Cambridge - August 2014

和本教室 一〇

変体仮名のすすめ



中野三敏

先回は連載第一回ということもあって、やや心悸亢進、大上段に、近代の成熟に欠かせないのが和本というインフラであるなどと広言し、あまつさえその和本は現代日本知識層の大部分から見事に乖離しているのが問題だと、何やら悲憤慷慨の態となった。理由の第一は、要するに明治以来、この国の学知の基盤がほとんど西洋の学根ざすことになったので、十九世紀までの学知を示す器としての和本は、国文学という契沖以来の学の伝統を担う分野以外、すべての知識人にとって、趣味として以外ほとんど読む必要のないものになったからであらうという辺りに落ち着かざるを得なかった。

しかし、百歩譲って、近代の学知にとつていかに迂遠で不必要なものではあろうとも、なればこそ古典の必要性は十二分に認識せられているに違いないし、実際、なにがしかでも古典に通じないでは、知識人顔はできなからうというのは、多分、なお共通理解ではあるはずと思う。そこで一歩踏みこんで、現代日本の知識人は、大好きな「徒然草」や「奥の細道」を、何によって読み、理解を行き届かせているのかというと、多分、ほとんどの人が活字に翻字された文庫や注釈書に拠っていること、想像するまでもなからう。ここに至ってようやく、和本離れの根源的な理由に思い至ることになった。すなわち和本を構成する基本

単位としての文字の読解力がその問題なのである。それは楷書の漢文を以てする経書や仏書類を除けばほとんど百パーセント、その名もおぞましい変体仮名や草書体漢字によって記されている。そしてこれらの文字を、少なくとも江戸の一般人と同程度のスピードを以て読む能力を備えた知識人というものが、今や絶滅危惧種化しているという現状に、ようやく気づくに至ったのだからまことに能天気なことではあった。

しかし、本当に絶滅危惧種化しているかどうか。その実態を数値化した報告などは残念ながらなさそうだが、より身近に類推する手段はある。例えば筆者自身、つい数年前まで在籍していた旧国立大学文学部の

教官(今は何と称ぶのでしょうか)で考えてみれば簡単なこと。現在はおそらく六十人近くの中で、右に述べたような事例にあてはまる人数は、といえ、せいぜい三人から五人しか思い浮かばない。あるいは一般の方々には、それでも半数近くはと御思いがましれぬ。しかし残念ながら現状は一割に満たぬ数字にしかなりえない。無論、その他の九割近い人々は、英・独・仏、あるいは中国語・朝鮮語、さらにはギリシャ・ラテン語に堪能な人々であることは疑いない。そしてそれらの人々の研究対象としては、変体仮名や草書体漢字で書かれた書物などは全く関心の外にあって当然なのである。翻って筆者などは特に外国語は苦手中の苦

手なので、いわば五十歩百歩、ほとんど目糞が鼻糞を笑うようなことかもしれないが、自国の古典を、古典語のままでは知識人の一割に満たぬ数しか読めない、あるいは読まないという現状は、かなり異常なことなのではなからうか。それでも、活字で読めばよいではないかという反論は、当然予想できるが、そこにまた根本的な問題があるように思う。

それは第一回にも触れた通り、青臭い近代を抜け出して、成熟した近代をめざすための大きな要因となる、もう一つの眼の獲得という所に帰着する。それは又、とりも直さず未熟な近代の枠組みによる古典認識を一旦解体して、まずは新たな認識の枠組

みを考えることになるのは当然なのではなからうか。やや気恥ずかしいが今風に言えば、ある種のパラダイムシフトということにもなるか。その時、従来の活字化された古典というのは、しよせん従来型の認識の枠組みの中で、活字化に晒すとされたものでしかありえない。そしてそこに満足している限り、従来型の枠組みから抜け出すことはとうてい不可能なのではないか。

しかもこれまで活字化された古典というものは、江戸期以前のものばかりで、こゝと江戸に関する限り、おそらくこれまた一割にも満たぬものでしかなからう。それだけを見てよしとしている限り、パラダイム

あなたの大切な「第二の人生」を悪夢にかえないために！

田舎暮らしに殺されぬ法

丸山健二

定年後の人生を田舎暮らしに託して本当にいいのか？
田舎暮らし歴40年の著者が、安易なプランに潜む危険を説く。



定価1,365円(税別)
四六変上製・184頁 ISBN978-4-02-250440-1

朝日新聞出版

ソフトなどできるはずもない。また江戸以前の古典の場合も、活字化の割合においてはかなりな達成度を示してはいくが、それらはすべて写本として伝来しているのであれば、一点ごとに数十・数百のヴァリアントが存在するのは常識である。そして活字化はほとんどその内の一種のみ。ということは必然的に、活字化されたもの以外に目を及ぼさぬ限り、新しい梓組みの組み上げはやはり不可能に近い。

そこでまた、だからこそ専門家の出番で、変体仮名や草書はそこへ任せておけばよい。そのために飼ってあるのがわからぬかと仰せられるやもしれぬ。専門家の存在理由を保証していただけるのは有難いことのようにはあるが、現実には近年の大学事情によって、そのような専門家の養成そのものが大ピンチの状況であることは、大学人にとってはほとんど常識化しており、近い内には活字化の担い手そのものが絶滅するやもしれぬ。となればもはや専門家など頼むにたりぬ。やはり知識人たる者、自前で変体仮名の練習に励むしかないのではな

かろうか。

とはいえ、練習に励むといえ、何やらつらく厳しい作業のように聞こえるが、それほど大それたことであろうはずはない。古典語とはいえ、まずは昭和戦前までは十分に活きた言語であったものの練習である。いわば日本人のDNAにしっかり組みこまれているはずで、外国語の練習とは根本から違う。現に街を歩けば至る所に変体仮名仕様のすしやそばの看板が目に入るし、ミシュラン三つ星とまでいわずともちよつと気の利いた和菓子屋や懐石料理の品書きなど、また謡曲や俗曲の稽古本、芝居・寄席の絵看板、角力の番附、どれをとっても結構御馴染み。大ていは読めずとも気合いで読める文字なのである。要はちよつとしたその気になるかならないかの問題に帰着しよう。

筆者が大学教官の頃、研究室では必ず大学院生から新入生までひっきりぬめて「変体かなを讀む会」という企てを続けていた。略称「変たいの会」、授業の合間の手抜き仕事ですぐに上達する。上達の度合いに

応じて変たい度一から変たい度五まで、時にはその度数でたがい呼び合ったりもしていた。現在その変たい度五の連中が、各地の大学で教鞭をとっている。

教材は何でもよいが、とにかく一冊を讀みあげるのが肝心で、最初、無残なつかえぶりだった学生が、読み上げる頃は十分な達成度を示す。秘訣といって特にないが、敢えていえば一字一字にこだわらぬこと。読めない文字は飛ばして先へ進む。進むほどに前は読めなかつた文字が、いつの間にか読める。もう一つは文章として把握すること。ひとまとまりの文章として読めば、日本語だから一字位読めなくとも前後の続き具合で見当がつき、それによって一字単位の読みもわかる。無論「くずし字用例辞典」などで漢字の草書体は確かめるべきは確かめ、仮名も字母の違いなど確認はすべきだが、コツはとにかく囚われずに先へ進むことにある。その後「手紙を讀む会」となって儒者・文人の手紙などが一応読めるようになれば一丁上がりであろう。手紙や日記などというものは、初めから完

壁な訓みを期するのは無理で、要は意が通ればよしとする位のいい加減さが上達の鍵である。その上で一字一字の訓みに彫心鏤骨する境地も開ける。

独力での練習も、やってみれば簡単なことだが、変に喰わず嫌いな人が多いのではなからうか。例えば「奥の細道」の板本（初版本・後印本・影印本・写真版、何でも可）と、その忠実な活字本（行数や字数、清濁、おどり字なども全く同じに翻字したもの）とを引き合わせて読み進めれば十分であろう。続けて「雨月物語」の一話や、「八大伝」の一章、さらには上って「好色一代男」な

ど、教材はいくらでもある。春本ならば上達間違いなし。

読むにあたって教材の清濁や句読点は自分で補いながら読まねばならない場合が多いので、その補った箇所を明確に識別できる教材さえあれば、独力でも至って簡単なことかと思う。ただしその場合もコマ切れの教材ではなく、一話なり一冊なり、読み通した達成感が大事だと思う。

実は、もう一つ秘策がある。これはある不良老年の知人にヒントを得たのだが、一太郎やケータイのフォントに入れるのはどうかという。変体仮名の字母は五十音の一

月日は百代の過ぎるを
かふ年も又旅人也
舟の上に生涯を
うかへ馬の口とらえて老をむ
かふる物は日々旅にして旅を栖とす
古人も多く旅に死せるあり
予もいつれの年よりか
片雲の風にさそはれて
漂泊の思ひやます
海濱にさすらへ
去年の秋
江上の

（「奥の細道」元禄十五年 井筒屋版）

月日は百代の過客にして 行
かふ年も又旅人也 舟の上に生涯
をうかへ馬の口とらえて老をむ
かふる物は 日々旅にして旅を栖とす
古人も多く旅に死せるあり
予もいつれの年よりか 片雲の風に
さそはれて 漂泊の思ひやます
海濱にさすらへ 去年の秋 江上の

（「奥の細道」翻字）

音につき平均三種ほどで十分だろう。全部入れても百五十から二百文字。入れてさえしまえば、新しがりの、いや進取の精神に富む我が国の女子高生達の間、アツという間に横書き変体仮名のメールが飛び交うことになって、某々文化センターで若い先短い身が、同じような御老体相手に、汗をかきかき覚えてもらおうより、よほど効率よく普及させることができよう。そういえば例の丸文字も、かつては変体少女文字と呼ばれていたではないか、これならば、何も国語審議会や、古典の明日を考える会などで、しかつめらしい議論にも及ばぬ。まずは文字に馴れてもらえばよい。何とかこの案に一肌ぬいで下さるケータイ会社はないものか。これは結構本気の御願いです。

（なかの みつとし・近世文学）

Nakano Mitsutoshi 中野三敏, *Wabon no susume. Edo wo yomitoku tameni* 和本のすすめ—江戸を読み解くために, (Iwanami shoten, 2011), pp. 1-14.

[See PDF file](#)

Japanese manuscripts and woodblock printed books: useful terminology

The word *komonjo* 古文書 is often used in a quite generic fashion to indicate any text written in *hentaigana* and *kuzushiji*, normally produced before the Meiji period. This is not the most correct use, though. In reality there are different types of texts and different terms to indicate these kinds of texts. It is important to recognize the different types of texts and to name them correctly, in order to avoid developing false expectations towards one text. The following pages are intended as a guide to distinguish three types of texts and they offer an annotated bibliography of the main resources that can be used in order to become familiar with each of these textual types.

Kohitsu 古筆

This term refers to manuscripts produced up to the Edo period. Despite the fact that texts written in *kambun*, such as Buddhist sutras, are considered an essential part of *kohitsu*, the majority of *kohitsu* are texts written in Japanese such as *waka* and *monogatari*. The combination of calligraphy and beautifully designed paper make *kohitsu* highly valuable as objects to be appreciated for their artistic value. The appreciation of *kohitsu* as art is visible already from the Edo period. Many wealthy people, among *bushi* and *chōnin*, developed an interest in collecting *kohitsu* to the extent that many manuscripts were dismembered and the single sheets obtained through this process gave life to what are known as *kohitsu tekagami* 古筆手鑑. These are normally albums in the format of *oribon* 折本 (see explanation on p.19) in which single sheets from *kohitsu* are displayed in a specific order to allow the full appreciation of their artistic quality. The most famous *tekagami* are *Mino yo no tomo* 見努世友 and *Moshiogusa* 藻塩草.



Itsuō Art Museum

みすへき人のこのよならねは
をとこのあになりし人に
すみよしのきしにきよするおきつなみ
まなくかけてもおもほゆるかな
かへし
すみよしのめに近からはきしにおて
なみのかすともよむへき物を
うくひすにみをあひかへはちるまで
も

The artistic quality of *kobitsu* is enhanced by the fact that many of them were written by poets who were also renowned as fine calligraphers, such as Ki no Tsurayuki 紀貫之, Fujiwara no Teika 藤原定家, Fujiwara no Kintō 藤原公任, etc. As can be seen from the transcription of the example included above, the text is written mainly in *hiragana*, with a small number of *kanji*. The variety of *hentaigana* used is greater than what we find in Edo-period printed texts or manuscripts. Some of these *hentaigana* even become characteristic features of a calligrapher's specific style.

If you are not a specialist of the Heian and Kamakura periods and do not 'naturally' get exposed to *kobitsu* in your research, the only way to master the reading of *kobitsu* is to read as many examples as possible. As mentioned above, the reading of *kobitsu* requires a set of palaeographic skills which are slightly different from Edo-period printed books and manuscripts. Therefore they require a specific training, which can be achieved only by reading as many *kobitsu* as possible. This set of skills is essential for scholars of art, also of Edo-period art, as the calligraphy produced in the Edo period often followed the styles applied in *kobitsu*. The following resources will prove particularly useful for your self-study.

Nagoya Akira 名兎耶明, *Kana wo yomu. Hentaigana kaidoku to, kobitsu no kanshō* かなを読む—変体仮名解説と、古筆の鑑賞 (淡交社, 1993) [This is an introductory manual that teaches the fundamentals of the *hentaigana* used in *kobitsu*. It is an excellent starting point for your self-study.]

Kobitsu tekagami 古筆手鑑 (Idemitsu bijutsukan, 2012) [This is the catalogue of an exhibition of *Minu yo no tomo* and *Moshiogusa* that took place at the Idemitsu Museum in 2012. It contains excellent reproductions and accurate transcriptions of selected sheets of these two *tekagami* together with other examples of *kobitsu* kept in the Idemitsu Museum.]

Tekagami 手鑑, *Nihon no bijutsu* 日本の美術 n. 84, 1973 [It includes pictures and transcription of famous *kobitsu* which are included in *tekagami* kept at Tokyo, Kyoto and Nara National Museums. The transcriptions must be used with sufficient care as they are not always accurate.]

High-quality reproductions and accurate transcriptions of whole famous *kobitsu* are available in the series named *Nihon meibitsu sen* 日本名筆選. These are books originally designed as samples for calligraphy but can be used as very useful tools for reading practice as well.

Nihon no sho. Kodai kara Edo jidai made 日本の書—古代から江戸時代まで, special number of *Taiyō* 太陽 ('Nihon no kokoro' 日本のこころ – 191), 2012 [This is an illustrated history of Japanese calligraphic works from the Nara period to the Edo period. There are photographs of the originals with detailed explanations but no transcriptions.]

Nihon no bijutsu includes many numbers which focus on manuscript sources of specific periods (e.g., n. 183 on manuscripts of the Momoyama period, n. 468 on the copy of the *Genji monogatari* written by Fujiwara no Teika, n. 503 on handwritten texts produced by *bushi*, etc.). They are extremely helpful in order to become familiar with the different aspects related to the world of *kobitsu*.

Hanpon 版本 and *shahon* 写本

This workshop focuses on Edo-period printed texts, normally referred to as *hanpon*. As shown by the extensive research conducted by Peter Kornicki, the Edo period is not only the age of commercial printing but also the age of ‘scribal publication’. Manuscripts (generically referred to as *shahon*) were produced for specific reasons alongside printed texts with the similar aim of reaching a wider readership. It is often the case that manuscripts were written using the *hentaigana* and *kuzushiji* normally applied in printed texts. Therefore *hanpon* and *shahon* are considered together here.

Since the present workshop focuses on this production, you will be able to access a selection of examples in the second part of this Manual. In view of your self-study time, some useful resources are given below.

Nakano Mitsutoshi 中野三敏, *Kuzushi ji de Hyakunin issbu wo tanoshimu* くずし字で「百人一首」を楽しむ (Kadoawa shoten, 2010) [As indicated in the title, this book focuses on the *hentaigana* used in a *bakumatsu* copy of the *Hyakunin issbu*. Beginner level *hentaigana*.]

Nakano Mitsutoshi 中野三敏, *Kuzushi ji de Oku no hosomichi wo tanoshimu* くずし字で「おくのほそ道」を楽しむ (Kadoawa shoten, 2011) [As indicated in the title, this book focuses on the *hentaigana* used in a manuscript copy of the *Oku no hosomichi*. Intermediate-level *hentaigana*.]

Nakano Mitsutoshi 中野三敏, *Kuzushi ji de Tōkaidōchū hizakurige wo tanoshimu* くずし字で「東海道中膝栗毛」を楽しむ (Kadoawa shoten, 2012) [As indicated in the title, this book focuses on the *hentaigana* used in *Tōkaidōchū hizakurige*. Beginner-level *hentaigana*.]

Adam Kabat, *Yōkai sōshi. Kuzushiji nyūmon* 妖怪草子—くずし字入門 (Kashiwa shobō, 2001) [This book teaches how to read *hentaigana* by using *kusazōshi* 草双紙 which recount stories of ghosts, monsters and strange creatures. Beginner-level *hentaigana*.]

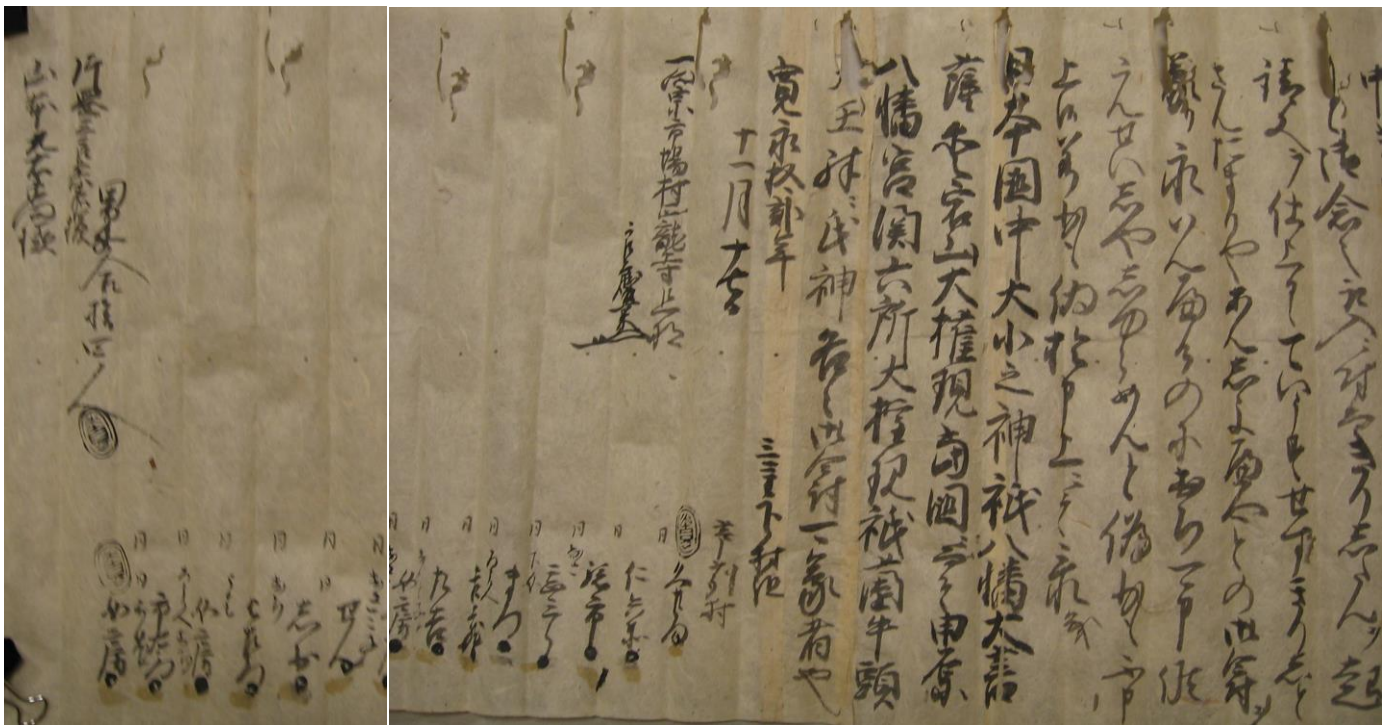
Kanno Shunsuke 菅野俊輔, *Kaite oboeru Edo no kuzushiji iroba nyūmon* 書いておぼえる江戸のくずし字いろは入門 (Kashiwa shobō, 2006) [Beginner-level *hentaigana*]

Kanno Shunsuke 菅野俊輔, *Kaite oboeru Edo meisho zue kuzushiji nyūmon* 書いておぼえる「江戸名所図会」くずし字入門 (Kashiwa shobō, 2006) [Beginner-level *hentaigana*]

Yoshida Yutaka 吉田豊, *Edo kana komonjo nyūmon* 江戸かな古文書入門 (Kashiwa shobō, 1995) [Here the word *komonjo* is generically used to indicate Edo period printed texts written in *hentaigana* and *kuzushiji*. This book introduces books printed in the late Edo period, in particular books used in *terakoya* schools, passages from *Ogura hyakunin issbu* 小倉百人一首 and portions of *kusazōshi*. The level of difficulty of *hentaigana* and *kuzushiji* is similar to that introduced on the first day and the morning of the second day of the workshop.]

Komonjo 古文書

This term refers to handwritten documents, which are normally written in *sōrobun* 候文 and belong to the realm of bureaucratic and notary documents (e.g., inheritance, money lending, etc.), temple records, official correspondence, contracts (e.g., marriage, divorce, employment, etc.), regulations, etc. They are normally kept in archives (most notably the [Kokuritsu Kōbunshokan](#) 国立公文書館) and they constitute indispensable resources for historians of pre-modern, early-modern and early-Meiji Japan. This type of material requires specific skills which are partly different from the skills which are necessary for *kobitsu*, *hanpon* and *shabon*. Namely, it is necessary to master the grammar of the *sōrobun* style, idiomatic expressions used in *sōrobun*, a wider number of *kuzushiji*, a specific calligraphic rendering which is applied only in this kind of texts, and a large use of *itaji* 異体字 (unorthodox forms of *kanji*).



きりしたん宗門御改二付起請文前書之事

一私義妻子共二終二きりしたん宗旨二不能成

一向宗市場村正龍寺且那二而御座候

度々御改被成去々々年も去口も書物

仕彼寺之且那紛無御座候旨証文口

記差上申処二今度從 広儀御法度

稠敷被 仰出三付而又右之寺之住持

此記請文裏判記上申候我等屋敷

之内家之内老若男女童迄も此誓

紙二はつれ申者一人も無御座候者心

中にきりしたんを守申儀も御座可有

口口御念之記入二付而きりしたんを起

請文を任上申候ていうすせすきりしと

さんまりやあんしよへやとの御罰ヲ

蒙り永いんへるのにおち可申候

こんせいしやしゆらめんと偽少も不申

上候若少も偽於申上二て添も

日本国中大小之神祇八幡大菩薩

薩摩守山大権現当国二ては由原

八幡宮關六所大権現祇園牛頭

口王殊二氏神名之御罰可蒙者也

寛永拾貳年 三三下村組

十一月十七日

一向宗市場村正龍寺且那

良慶業(花押)

片甚三郎兵衛様

山本九右衛門様

女男合十四人

青刈村

同久左衛門(血判)

同仁兵衛(血判)

同?市(血判)

同な(勸三郎(血判)

同下女まつ(血判)

同ろろ人吉蔵(血判)

同左吉(血判)

同ほんな子女房(血判)

同おと子せん(血判)

同同しお(血判)

同おち与左衛門(血判)

同おは女房(血判)

同ろろ人おち市右衛門(血判)

同同うは女房(血判)

Marega Collection, Rome

The present workshop is not designed to teach the skills which are necessary to access *komonjo*. We include only one example of *komonjo* on the last day of the workshop. Here are basic and useful resources for the study of *komonjo*.

Mori Yasuhiko 森安彦, *Komonjo wo yomō* 古文書を読もう (Kōdansha, 2003) [A collection of *komonjo* of the Edo period containing copies of the original texts, transcriptions and explanations for each text.]

Yoshida Yutaka 吉田豊, *Komonjo tenarai* 古文書手習い (Kashiwa shobō, 1998) [A collection of *komonjo* of the Edo period containing copies of the original texts, transcriptions and explanations for each text.]

Hayashi Hideo 林英夫, *Komonjo daijisi* 古文書大字叢 (Kashiwa shobō, 1999) [A dictionary of words and idiomatic expressions used in *komonjo*. The user can search words in *aineo* order or single *kanji* that compose a word through the *kanji* reading. Though for each word or idiomatic expression both the modern typesetting and the *kezushiji* version are given, this dictionary is not designed to search *kezushiji*. There are useful appendixes about the *bakufu* and its key persons along the Edo period, the exchange rate for Edo, Kyoto and Osaka, the units of measurement in the Edo period, the *itaiji* which were most widely used in *komonjo*, etc.]

Hayashi Hideo 林英夫, *Kinsei shōjō taikan* 近世書状大鑑 (Kashiwa shobō, 2001) [A dictionary of words and idiomatic expressions used in Edo-period *komonjo*. The user can search words in *aineo* order through the index or can search words according to their position in the document (e.g., introductory greetings, final remarks, etc.). Though for each word or idiomatic expression both the modern typesetting and the *kezushiji* version are given, this dictionary is not designed to search *kezushiji*. This dictionary also contains two substantial sections that give examples of Edo-period *komonjo*, both in their original format and in transcription.]

Hayashi Hideo 林英夫, *Kinsei komonjo kaidoku jiten* 近世古文書解説字典 (Kashiwa shobō, 1972; reprinted in 2005) [This dictionary is composed by three sections. The first section includes examples of Edo-period *komonjo* both in their original format and in transcription. The second section offers idiomatic expressions ordered according to their position in the document. The third section is a dictionary of *kezushiji* used in *komonjo*. *Kanji* can be searched through their radicals and their readings.]

Hayashi Hideo 林英夫, *Komonjo kaidoku jiten* 古文書解説字典 (Kashiwa shobō, 1993) [This is a *kezushiji jiten* for *kezushiji* used in *komonjo*. The search is the same of a normal *kezushiji jiten*. There are useful appendixes containing idiomatic expressions, common names of persons and places, etc.]

Kouamé, Nathalie. *Initiation à la paléographie japonaise* (Paris: L'Asiathèque, 2000) [This is an invaluable guide to the reading of Japanese manuscript materials based on documents relating to the Shikoku pilgrimage in the Edo period. It includes reproductions of the originals, transcriptions, translations into French and notes].

The following *kuzushiji jiten* mainly includes examples from handwritten letters. Therefore it can be used as a tool for reading *komonjo*:

Tōkyō tegami no kai 東京手紙の会 (ed.), *Kuzushiji jiten* くずし字辞典 (Shibunkaku shuppan, 2000)

The style used by women in letters is considered part of *komonjo*. A useful introductory book to this specific epistolary style can be found in:

Yoshida Yutaka 吉田豊, *Komonjo nyobitsu nyūmon* 古文書女筆入門 (Kashiwa shobō, 2004)

* * * *

There are few resources that put *kobitsu*, *komonjo* and *hanpon/shabon* together. Useful books are the following:

Sugano Noriko 菅野規子, Sakurai Yuki 桜井由機, *Komonjo no tanoshimu* 古文書を楽しむ (Takeuchi shoten shinsha, 2000) [It includes printed texts used in *terakoya* schools as well as Edo-period *komonjo*]

Tsunoda Eriko 角田恵理子, *Nihongo no kuzushiji ga yomeru hon* 日本語のくずし字が読める本 (Kōdansha, 2011) [It includes a wide range of handwritten sources such as Heian-period *kobitsu*, Edo-period *komonjo*, Edo-period movable-type printed texts, etc.]

As regards the field of paintings and of *ukiyo-e* other typologies need to be considered. Among the recent publications, useful resources for approaching the variety and vastness of this field are:

Amy Reigle Newland (ed.), *The Hotei Encyclopedia of Japanese Woodblock Prints* (Amsterdam: Hotei Publishing, 2005)

Ellis Tinios, *Japanese Prints: Ukiyo-e in Edo, 1700-1900* (London: The British Museum, 2010)